

情熱—不可能を可能にするマジック



伊藤恵利

(株)メニコン/名古屋工業大学生命・応用科学科
[460-0006] 愛知県名古屋市中区葵3-21-19
特任准教授(大学), 博士(工学).
専門はゲルおよびネットワークポリマーの物質
輸送および構造解析.
e-ito@menicon.co.jp

www.menicon.co.jp/index.html

高校時代に出会った「日常を驚くほど便利にしてくれた商品」、大学時代に『高分子科学』がこれを可能にしたと知りました。そんな『「幸せ」を提供する商品を作りたい』と入社した研究所で、次世代コンタクトレンズ素材の開発に携わることができました。未だ、『高分子科学は、人を幸せにする』が信条です。

ただ、入社してすぐに「3年は働いてね」と言われた時代。正直なところ、20年以上高分子科学に携わるとは想像していませんでした。まして、40代で学位を取得し、母校の教壇に立つとは、夢にも思いませんでした。

「あなたの能力や知識ではない。私は、あなたの情熱に期待する」

30歳を目前に、最も尊敬する上司から言われた言葉です。情熱なんて誰でももてるもの、と思った記憶があります。ただ、この25年を思うとき、使い古された言葉ですが、やはり『情熱』の一言に尽きた時間であったと思います。

研究や開発の場では、『1 + 1 = 3の実現』というような課題が与えられます。課題を与える側も与えられる側もみんな理系の人なのだから、「答えは『2』でしょ！」という突っ込みをいれたくありませんね。

そんな理不尽なテーマに、まだ純粹だった私は、「不可能という当たり前の結論を出す指示が出るわけがない。できないのは、自分の能力不足。」と解釈しました。解決できないことにあせった私には、「不可能な理由」を思う余裕はなく、「どうしたら可能になるか？」だけを考えました。実は、数年後「不可能だと思っていたが、(結婚したから間もなく辞めるだろうし)ダメ元でやらせてみた。まさか、本当に実現するとは思わなかった。」という種明かしがありました。

ただ、そのときの「可能・不可能」よりも、「どうしたら可能になるのか？」という思考こそが、今へ至る道標であり、情熱の源であったと思います。

そして、『高機能素材の開発』を起点に、『素材機能を実現する機序の解明』に興味をもち再度大学へ、知りえたことを発信したく『技術広報の拡充』へと世界を広げてきました。まさに、情熱に誘われた私の『仕事』でした。

9.11同時多発テロの映像が流れるたびに、その年からの日々を思い返します。2001年3月妊娠判明、5月双子の告知。7月出張で訪問したニューヨークで、2カ月後に世の中から消える世界貿易センタービルを、おなかの中の7カ月の双子と眺めていました。

「双子？ そのうえ、仕事もあって、大変でしょ？」と、よく聞かれます。でも、私は双子しか育てたことがなく、産休育休の半年間以外いつも仕事をしてきたため、仕事をともなわない育児も知りません。正直、問われる『大変』の意味がわかりません。

ただ、無我夢中で過ごすうちに、気づけば育てていたつもりの娘は高校生になり、今では帰ると夕食が出てきます。深夜まで仕事をしていると、隣で勉強を始め、時として進まぬ仕事に現実逃避する私は、彼女達に叱られます。これでは、どちらが親かわかりません。

妊娠中の海外出張に「胎内で低気圧下になると、脳に影響がある」というおおよそ非科学的な助言や、「生後半年から保育園に預けられてかわいそう。ぐれるよ」という心配。日常が忙しいので、いちいちとりあう余裕はなく、「心配してくれる疑似パパが一杯で幸せだね」と、笑い流してきました。

幸い、待たなしの子育てこそ、『不可能な理由を述べる余裕』はなく、まして双子という格好の研究対象を与えられ、『私事』も興味深く情熱を傾けることができました。

興味の尽きない研究や子供に対し、情熱のみで取り組み続けた『仕事と私事』、そんな甚だつたない経験ではありますが、そこから未来ある皆様へ。

最近、大学や学会会場で「育休制度は？ 女性の活用は？」といった質問を受けます。巷では、就職も育児も、不可思議な情報が氾濫しています。たった一度しかない人生、できれば失敗したくない。だから、情報を集める。その気持ちは、とてもよくわかります。でも、かえって転ばぬように集めた情報に縛られ、大切なチャンスを見逃していませんか？

ときには、スマホやPCを閉じ、内なる希求に声を傾けることで、意外に単純なところに、最良の答えが待っていたりするのではないのでしょうか？